

i051k

平成 2 年度

秋田県環境技術センター年報

第 18 号

(1990)

秋田県環境技術センター

は じ め に

平成2年度の事業概要と調査研究の結果を、年報第18号として取りまとめましたのでお届けします。

ご承知のとおり、産業から端を発した公害は、規制や公害防止対策によって著しく改善され、昨今ほうるおいや安らぎのある住みよい快適環境を求めるようになりました。生活水準が向上し、余暇の有効活用が叫ばれ、また、利便性を追い求めた結果、我々の日常生活と密接なかかわりあいをもつさまざまな環境問題が生じ、新聞、テレビ等で報道されない日がないくらいです。

大気汚染では酸性雨や低沸点有機化合物、二酸化窒素による汚染等、水質関係では湖沼等の閉鎖性水域における富栄養化、生活雑排水による中小河川の汚濁、トリクロロエチレン等による地下水汚染、ゴルフ場からの農薬流出、有機スズ化合物等の微量有害有機化合物による汚染等の問題があります。

一方、目を地球的規模の環境問題に向けると、特に平成3年は、湾岸戦争における油井の燃焼による大気汚染や原油の流出による海洋汚染等、また、フィリピンのピナトゥポ大噴火による大気汚染がありました。これらの出来事が地球環境にどのような影響を及ぼすのか懸念されており、地球環境保全の大切さを痛感させられた年でもありました。そのほかにも地球の温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、熱帯雨林の減少、有害廃棄物等の問題が山積しており、地球環境問題への対応は、待ったなしの状況にあると言っても過言ではありません。このような時期に本年の6月、ブラジルで環境と開発に関する国連会議（地球サミット）が開催されますが、本会議の成功を祈らずにはおられません。

さいわい秋田県は、大気、水質等の環境も今のところ概ね良好な状態で推移しており、また、自然に恵まれた素晴らしい景観がいたるところに残っております。この素晴らしい環境を守り、次の世代に引き継ぐことは、環境の仕事に携わっている我々の責務であると考えております。

平成2年度は沿道地域の浮遊粉じん等に関する調査研究や降水成分の高度差に関する調査研究、八郎湖の富栄養化の大きな要因である八郎瀉干拓地における高濃度リンの発生源に関する調査研究、河川水中におけるジフェニルエーテル系除草剤に関する調査研究等を行ったところです。

これからも職員一同、環境保全のため鋭意調査研究に努め、その成果を環境行政の推進に反映して参りたいと考えておりますので、本年報をご高覧戴くとともに、ご批判、ご指導を賜れば幸いに存じます。

平成4年1月

秋田県環境技術センター
所 長 長谷川 達 夫